

平成三十年に消息を發布して以来、寢殿の改築をはじめとして、諸施設が整えられ、いよいよ明年の令和五年五月には、慶讃法会をお迎えさせていただくことになりました。

コロナ禍において、人の動きが制限され、社会・経済活動が停滞することに、不安や畏れ猜疑心が募り、人間不信は益々社会的な問題となっております。

また世界では、戦争によって尊い命が奪われているにも関わらず、その争いは激しくなるばかりで、歯止めがきかない状態です。今、私たちの世界はどこへ向かって進んでいるのでしょうか。

自由・平等・平和の国の実現は、誰もが願う国家の理想です。そして私たち一人一人もそれを願って生きています。しかしそれがかなわないのは正義と正義が争い、相手を許さないからではないでしょうか。

親鸞聖人は、「義なきをもつて義とす」と教えてくださいます。さらには「義」というのは、行者のおのおのはからうところなり」とおっしゃっています。

「はからい」とは、自分中心の思いや価値観です。「義なきをもつて義とす」とは、人間の計らいを超えた世界を拠り所として、生きることを表すのでありましょう。

阿弥陀如来は地獄・餓鬼・畜生の無き世界を求め本願を建てられました。ところが、苦しみや迷いの世界はこの現実からいっこうに無くなりません。そのことを如来は悲しまれ、我々衆生を大悲されました。

慶讃法会の基本理念として「大悲に生きる人とあう 願いに生きる人となる」を掲げました。

「大悲に生きる人とあう」とは、阿弥陀如来の大悲の心に生きている人との出遇いを意味します。親鸞聖人にとっては法然上人がその人でした。そのような本願を拠り所として願いに生きる人が誕生してくるのです。

阿弥陀如来は、自分中心の思いの中で苦しみ、傷つけあって生きている私たち一人一人を悲しまれ、撰め取ってくださいています。この如来の大悲に目覚める時、生きることに大きな喜びを感じることができ、そこから生きる意欲と希望とが生まれてきます。それが「願いに生きる人となる」ということです。

まさに慶讃法会とは、仏徳を讃嘆し、報恩謝徳の伝灯に連なる法要です。皆様と共に阿弥陀如来の本願を聞き開き、無辺の生死海を尽くす道を歩みたく、慶讃法会をお迎えいたしたいと思えます。

一人でも多くの方々のお参りを願っております。

令和四年七月二十六日

釋真覚